

オペラ評

ドニゼッティのオペラ・セリアばかり3作品をシリーズにして、昨年から来年までの3年間、ズッシリ「ベルカント・オペラ漬け」にしようという企画。昨年は「マリア・ストゥアルダ」で、音楽クリティック・クラブ賞を受賞。好調の波に乗って今年は「ラ・ファヴオリータ」に挑戦した。



撮影：仲野達也

演出・井原広樹、指揮・牧村邦彦は変らない。

結論からいうと、昨年以上の成功をおさめた。まずは、井原、牧村のコンビのよさ。作品的には、台本の不自然さなど、決して傑作とはいえないが、ベルカント特有の「声」の聴かせどころや、ドラマティックな盛り上がりなど、ツボを心得た音楽作りで、客席をすっかり引きつけてしまった。プロの職人芸とでも

いおうか。

この期待に応えたのが、まずフェルナンド(藤田卓也)だ。(いずれも初日のキャスト)海外での活躍が長く、関西のオペラには、これがデビューとこのことだが、ともかく超高音の「ハイC」の連発を見事にクリア。ブ

ネス(小梶史絵)には、歌唱と同時に、何より強い存在感が要求された。王の側近ドン・ガスパロ(小林峻)は好演。こうして若い新人が、次々と登場してくる状況は楽しみだ。

ザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団も好演。

プロの職人芸で

昨年以上の成功

第20回みつなかオペラ

「ラ・ファヴオリータ」

ラボーの声が鳴りやまなかった。これは楽しみなテノールの出現だ。

レオノーラ(並河寿美)は、持ち声がメゾに近いので、この役にはピッタリだし、バルダッサレ

第4幕、修道院のシーンで、電子オルガンによるパイプオルガンの響きが、効果的に使われていた。

(片桐直樹)は、風格、声ともにベテランの味。アルフォンゾ11世(藤村匡人)の声に、いま少しの陰影がほしかったのとレオノーラの腹心の女イ

来年9月には、いよいよ「本丸」「ランメルモールのルチア」(ドニゼッティ)に挑む。みつなかホールは、よくやる。(9月24日、川西市みつなかホール)

(日下部吉彦)